

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 2 年 12 月 27 日

氏名 有井 優太

所属 教職開発 コース

学籍番号 23-207037

指導教員名 秋田 喜代美 (教授)

1. 研究課題 校内授業研究を核とした学校改善プロセスにおける研究部の機能に関する研究
2. 報告する学術活動の実施期間 令和2年12月2日 ~ 令和2年12月4日
3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し
4. 学術活動
 - 国外 国内
 - ①英語論文公表
 - ②研究科教員の研究プロジェクト参加
 - ③フィールドワーク
 - ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑥研究指導委託
 - ⑦留学
 - ⑧国際研修
 - ⑨国際インターンシップ
 - ⑩その他 (具体的に: _____)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	④
<p>2020年12月2日～4日の間に開催される国際学会 World Association of Lesson Studies(WALS)において、口頭での研究発表を行った。本学会は申請者の研究分野である授業研究に関する国際学会である。本来であれば、アメリカ(サンフランシスコ)で開催されるはずであったが、COVID-19の影響によりオンラインでの開催となった。発表申し込みの際、アブストラクトを2名のレビューアーによって評価され発表が許可が得られた。発表タイトルは「Teachers' Motivation in Lesson Study : Relationship between Research Team Leadership and Factors Affecting Teachers' Motivation」で学会2日目の12月3日に発表を行った。発表は事前に録音したものが1年間、学会HPに掲載される予定となっている。発表日当日は同じセッションであった6名の研究者および10名程度のオーディエンスと互いの研究発表についての質疑応答が行われ、様々な国の研究者と議論する機会を得た。また、他国の研究者の発表を聞き、メールでの意見交換をする機会も得られ、今後の研究活動にとって有益なつながりを得ることができた。</p>	

- (注)
- ① 年月日は西暦で記入してください。
 - ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 - ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 - ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究開発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

本学会は申請者の研究分野である授業研究に関する国際学会であり、世界各国の実践者・研究者が議論する場となっている。申請者の研究課題は『校内授業研究に関する研究部の機能に関する研究』である。日本を発祥とする校内授業研究は、2000年ごろから Lesson Study として世界各地で実践されるようになってきているが、持続的な校内授業研究を展開させていくにはどのようにすればよいのかといった“持続性”が世界的な課題となっていると指摘されている。申請者は、日本の校内授業研究が長い歴史の中で教師の学習に有効なシステムとして機能し続けてきた要因の1つとして研究部という研究推進を行っているチームのリーダーシップに着目している。研究部というチームが実践を推進しているといった視点はこれまでの海外の研究では管見の限り焦点が当てられておらず、日本において研究部を中心として校内授業研究が有効に機能している学校の事例から研究部のリーダーシップ機能について国際学会で発表することは意義のあることであると考えられる。

今回の WALS での口頭発表を予定している内容は、そのような研究部といったチームは教師集団が校内授業研究に主体的に取り組んでいくためにどのようなリーダーシップを発揮しているのかに関するものである。海外においてはパッチワーク的に教師の研修として取り入れられることも多くある Lesson Study であるが、日本の学校では、校内授業研究が文化として根付いており年間を通して教師集団が学びあい、校内授業研究を中核とした漸進的な学校改善が行われている例もある。本研究では、そのように年間を通して校内授業研究に取り組む学校を対象とし、その中で研究推進を行っている研究部は教師集団の主体的な参加のためにどのようなリーダーシップを発揮しているのかを検討する。このような日本の独自の視点を国際学会において発表することは、海外の研究者や実践者に対して示唆的な視点を示すことができると同時に、海外の研究者や実践者と議論を行うことで日本の校内授業研究の独自性が顕著になることへとつながると考えられる。このように日本の実践の独自性を研究の強みとする申請者の研究を国際学会において発表し、参加者との議論を行うことで、より日本の実践や申請者の研究自体が相対化されることが期待される。

このような背景のもと、本学会で研究発表を行い以下の成果を得ることができた。

第1に、学校全体で子どもを育てるために教師が校内授業研究に取り組んでいるということが日本の独自性であり、強みであるということの再確認ができた。海外の研究者らと議論し、その内容や反応から Lesson Study は教師の研修システムとして捉えられているため、6年や3年といった子どもが当該学校に通っている期間の中で学校組織として一貫したビジョンをもって子どもを育てるために校内授業研究を行っているといった視点があまり持たれていないと考えた。そこから、子どもの育ちを校内授業研究の軸とすることが、持続性といった観点からも効果といった観点からも重要な視点になりうると考えられる。

第2に、1点目と関連し、学校組織における Lesson Study の位置づけが日本と海外では異なっている点である。年間を通して校内授業研究に取り組む場合、学校行事など時間的な余裕などを考慮しながら効果的に教師集団が学びを深められるように日程が設定されていたりするが、今回議論した研究者の国々では組織的な営みとしてそこまで根付いていないといった反応があった。こういった点も日本の校内授業研究の強みであることが確認できた。

第3に、自身が研究で用いている概念・理論とモノを研究の基盤としている研究者の発表を聞き、交流する機会が得られた。校内授業研究に知識創造や専門職の資本といった概念を用いて研究していく際の概念の捉え方や用い方について議論することができるつながりを得たことは今後の研究推進にとって有益であると考えられる。